博士論文等内容の要旨

申請者氏名　岡本詩穂里

論文題目　**陶芸におけるグラデーション表現の探究―「積彩階調」技法の開発と制作―**

陶芸におけるグラデーションの制作方法は、釉薬・絵付け・染付など様々であるが、筆者が陶芸の世界に入って以来、研究と制作を重ねている練込み技法を用いてグラデーションを制作する。釉薬でも着色でも出せない独特のグラデーションを作ることができ、そのグラデーションに魅力を感じたからである。この技法はロクロ成形・タタラ成形・手びねり等の多くの成形方法に応用範囲が広いので、まだ多くの可能性が秘められていると思っている。

本論文では『陶土と顔料の割合（調合）を徐々に変えた色粘土を積み重ねてグラデーションを作る』ことが陶芸界ではあまり見られない試みであることに注目し、自身の制作でも新たな練込み表現を確立できないかと探究する。筆者はこの、色土と顔料の割合（調合）を徐々に変えた色粘土を積み重ねてグラデーションを作る行為を「積彩階調」と名付けた。

筆者は複数の色または異なる土を混ぜて一つの作品を作ることが、「練込み」であると考えている。ただし、完全に混ざりきり、練込み模様が見えなくなったものは「混ぜ土」であり、その土を使って制作しても練込み作品ではない。つまり練込み模様の識別が可能か否かが、練込み作品の線引きであると考えている。

以上の点を踏まえると、本技法は練込み技法に分類される。しかし本技法は、色土と顔料の割合（調合）を緻密に変化させることで、練込み模様を見せないことができる。一般的な練込み模様を生かした練込み作品とは異なり、「練込み模様が見えない練込み作品」と言う二律背反で意外な部分に面白さと新しさが生まれるのではないかと考える。

グラデーションは徐々の変化や漸次的移行（少しずつ変わること）を意味する。その中で陶芸におけるグラデーションは、①複数の個体に徐々に変化を付け全体として動きの変化を表すもの、②影の濃淡、③備前焼などに見られる自然降灰釉の密度の変化、④焼成による色の変化、⑤釉薬などによる色彩の変化などがある。本論文では動きや陰影などのグラデーションは除き、連なっている色彩の変化をグラデーションとしている。

本論文は以下の内容から構成されている。序章では本研究の動機について述べた。

第１章では、練込み（練上）技法の歴史について展望した。特に松井康成が構築した「同

根異色」法によって、練込み技法は格段に拡大し、今日に連なっていることを述べた。

第２章では、筆者の開発した「積彩階調」の制作について述べた。つまり、「１節　色の調合」では、具体的な積彩階調の制作方法を記載した。「2 節　形の比較」では、「積彩階調」を使い様々な形を制作した結果を論述した。その結果、本研究では、筆者が「トゲトゲ」と呼んでいる形が、「積彩階調」と一番相性が良いと結論づけた。「トゲトゲ」は、形だけでもインパクトがあり、先端に行くほど細くなる形が、徐々に変化するグラデーションに注目を集めるからである。写真１と写真２は筆者の初期のトゲトゲ作品である。

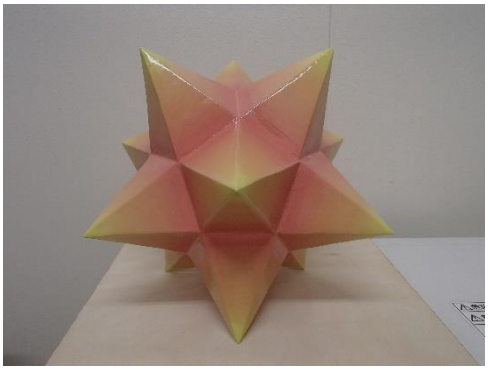

写真１　トゲトゲ基本形１

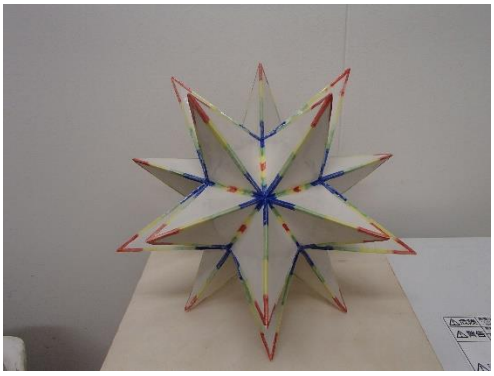

写真２　トゲトゲ基本形２

「トゲトゲ」を作るときに参考にしている形の正式名称は「星形小十二面体」(Small stellated dodecahedron)と呼ばれている形(写真 1)と「星形大十二面体」(Great stellated dodecahedron) と呼ばれている形（写真２）の２種類である。星形正多面体と呼ばれる形で、1619 年にドイツの数学者ヨハネス・ケプラーが発見した。本研究で筆者は、この星形多面体を基に作った作品を「トゲトゲ」と総称している。

「第３章　トゲトゲの制作」では、トゲトゲの制作過程、土の実験、表面の仕上げ方法について論じた。「1 節　トゲトゲの制作過程」では、「積彩階調」を用いた「トゲトゲ」の基礎的な制作方法を記載した。「2 節　土の実験」では、砥部土、さつま特白土、古信楽土、白信楽土の４種類の土を用いてトゲトゲを制作し、顔料の発色と、耐火度の相違を検討した。土の種類は全国さまざまであり、顔料の発色の違いや耐火度の違いなど結果もさまざまであった。例えば、古信楽土は耐火度が高く、大きい作品を作ることに適しているが、顔料の発色がそれほど鮮明ではない、また磁器土である砥部土は、顔料の発色は鮮やかであるが、成形が困難であることが判明した。従って、様々な土の中から自分の制作に適した土を見つけ出すことも重要である。

「第４章　トゲトゲ制作の応用」では、第２章・第３章で行った実験を基に制作を行った結果を記載した。「1 節　積彩階調の完成形」では、一つの作品の中で赤色から黄色のグラデーションを制作した。筆者の意図した「練込み模様の見えない練込み作品」を作ることができた。しかしながら色土の使い方が単調すぎて着色のように見えてしまったことから、土の配置などを工夫すれば、面白味が出てくると考えられた。「2 節　多様な形の開発」では、星形小十二面体や正二十面体などから独自のアレンジを加えてオリジナルの形を形成した（写真３）。同時に、「積彩階調」のより良い演出方法を考察した。つまり、トゲトゲの基本形は、同じ長さのトゲが同じようなグラデーションで構成されていた。応用形では、一つの作品の中にトゲの長さの違い、グラデーションの違いなどの要素を含めた。これによって基本形とは異なる多様なインパクトを与えることができた。

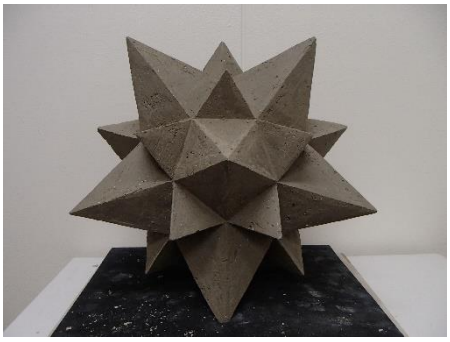

写真３　トゲトゲ応用形体

「３節　制作発表」では 2016 年 8 月 30 日～9 月 4 日まで倉敷中央画廊で開催した「岡本詩穂里作陶展」の概要についてまとめ、来場者からのコメントを分析した。

この「トゲトゲ」シリーズは、公募展などでも評価を得られ社会にインパクトを与えることができた。写真 4 は第 4 回新県美展（第 68 回広島県美術展，2016）の入選作品である。写真 5 は、第 56 回　日本クラフト展（2016）の入選作品である。写真６は京都花鳥美術館奨学金 2016 の優秀賞作品である。その他、読売テレビ「情報ライブ　ミヤネ屋」のセットオブジェに採用された（2015）。

写真４　Pop star

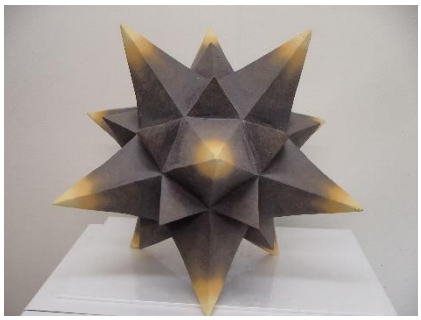

写真５　Black　shooting star

写真６ペンタゴンフラワー

「終章　本研究の成果と今後の課題」では、「1節　本研究の成果」と「2節　今後の課題」について述べた。本研究の成果として、（１）積彩階調の技法を考案し、新しい練込みの技法として確立させた。（２）積彩階調を最も引き立たせる形体として「トゲトゲ」に着目し、存在感のあるオブジェ作品を生み出したことが挙げられる。今後の課題としては、（１）グラデーションの配置等、積彩階調の精緻化、（２）積彩階調の応用範囲の拡大、（３）オブジェにとどまらず、本技法を用いた作品形体を広げていくことが考えられる。